

C-7 庶民衣服の研究(5)

—仕事着の被服構成—

淑徳学園短大 田中 陽子

1. 一世紀前まで、国民の大半が、小袖形式の仕事着の着用者であった我が国では、日本衣服の源流をここにとどめて、今日につづいた。生活即労働であり、生きる最低線にあった時代の農民服には、殊に用に直結した、有形、無形の学ぶべき数々の要素を有し、これら貴重な存在が急速に消滅しつつある現在、少しでも各地の資料を追求して、究明したいと考えるものである。

2. 実際に製作し、着用の経験者に頼ることは年々困難となり、それとて明治中期ごろが限度となった。今回は博物館、史料館、民芸館蔵の資料も、地方調査とあわせて参考とし、主として縫製面の特徴を考察したものである。

3. 農山漁村の各地方条件と、作業別、又地方慣習により、一地方ごとに共通形態を有しているが、仕事着には単仕立が最も多く、衿、綿入は季節よりも、労働によって着用する。その縫製は時間と労力を最少限にするため細かい工夫がなされている。仕立方には肩入、片身替、刺子、裂織等があり、地方的条件と、作業別の適応性が、形態構成の上に打出されている。

又常に限定された材料により、被服の堅牢性と機能性が計算されている事実は、仕事着の重点であろう。